

『頼りにされる教師』

管理職になり多くの先生に出会ってきた。今思い出してもどうにも割り切れない思いの先生がいる。

民主的な学級経営で生徒は放任状態、ところが指導していないにも関わらず、何かことが起きると猛烈に生徒を怒る先生。日常の指導の何たるかがわかっていないため、よく学級で問題が起きた。起きた結果は「生徒が悪い、その親が悪い」と責任転嫁が得意？仕舞にはこの学級の生徒3人が児童相談所のお世話になる羽目になり私たちを慌てさせた。

さて、私が関わってきた先生方の指導には大きく2つのタイプがある。

生徒が問題を起こすとA先生はその場をとらえて厳しく指導するタイプ。

B先生は根気強く時間をかけ対話を大事にしながら自ら反省させるタイプ。

いずれのタイプがいいかは一概には言えないが。

子どもたちは性格・能力・適正など育ってきた環境により一人ひとり異なる。したがって、指導に違いがあって当然であろう。ただ、言えることは、少子化・核家族化により最近の子ども達は、頭越しの怒声には慣れていないということがある。私どもがお世話になってきたカウンセラー広瀬先生の助言によると、その場をとらえての指導には感情が先走り、冷静になれないという弱点もあるので、基本的にはB先生の対応が大事になるということであった。

いずれにしても生徒指導に対する、学校としての基本的態度の共通理解を図っておくことが求められている。

若い頃の私はAのタイプ。経験を積むとともに、時間をかけて内面に入り込む指導の大切さがわかってきた。教師と子どもとの間は暗黙のうちに『心理関係』で結ばれていることが肝要。つまり、生徒指導の原点は、教師と児童生徒との『絆の深さ』によるということではなかったか。

『絆の深さ』になるまでにはいくつかの要素が考えられる。教育相談を取り入れた指導もそのひとつであるが、要するに、子どもと教師の間に腹を割った話し合いができていないか否かが大きなカギを握る。

授業時間はもとより、休み時間、昼休み、学校行事、部活動などは絶好の話し合いの場であり、教育相談を取り入れた生徒指導の場でもある。

教師からそれとなく、「 のことで不安があるんじゃない。」
子どもからそれとなく「 のことを相談したいんだけど。」

という雰囲気醸成されていることだ。

当たり前のことで今更恐縮でもあるが、そうっていない現実があるからこそ問題が起こり、対応によっては後始末に追われることになるのである。少なくとも「授業が終われば職員室へ一直線」というのでは『頼りになる教師』にはなれない。

現職時代、授業が始まって「生徒が落ち着かない、学習に集中しない」と嘆く先生方がいた。ところがどうだろう、チャイムが鳴ってから“のこのこ”職員室から出る先生方の多いこと多いこと。人には厳しく自分には甘いことに気づかない、そんな教職員集団だった。私は問題が起こった原因を教職員側に求めることから始めた。

まずはチャイムと同時に授業を開始する、こんな至極当たり前のことを申し合わせた。

さらに、教室に必ずだれか先生が居ることを確認した。授業が終わった先生は直ぐに職員室に戻らない、次の授業の先生は早めに教室に入ることで「生徒の話に耳を傾ける」ことなど、日常の当たり前を教員側が実践することで、生徒達からの信頼回復を誓い合った。